

僕は後悔していない

「もう遅い、遅いのか。」と気持ちが悪くなった。駅への歩く道、何も考えず、茫然と僕の足は進んだ。すぐには、家に帰る気持ちにならなかった。僕は、神社の境内を通り過ぎて、水泳客でにぎ合う木津川の河原を見下ろしながら、国道橋を渡り、誰もいない宇治川の土手を無心に歩いた。

そして京阪電車の鉄橋のそばにすわり、黙々と流れる宇治川の水面を土手にすわり一人見つめた。

時々、すさまじい騒音を出して、京阪電車がそばの鉄橋と渡って行った。

漠然と彼女の口から、「気がない」という言葉が聞きとれた様な気がした。

「家から遠い」という言葉が、耳にこだする。そんなのないよ、学校へ行く時はじゃあどうなんだ。

「友達が、知らぬ人と付き合えぬ方が良いといわはる。」と、彼女の声が聞こえた。

誰だって、初めは全然知らない人じゃないか。お互い、知り合う為に、付き合うんじゃないか。もし彼女に気があったら、こんな言葉は口から出ないのでは？

あいつを打って、その言葉を聞き流し、反論できなかった自分の姿、その姿がかわれに思えて来た。彼女に気がないとわかった以上、長い居は無用だったのでは？かえって、長い居して、彼女に迷惑でなかったのでは？



600